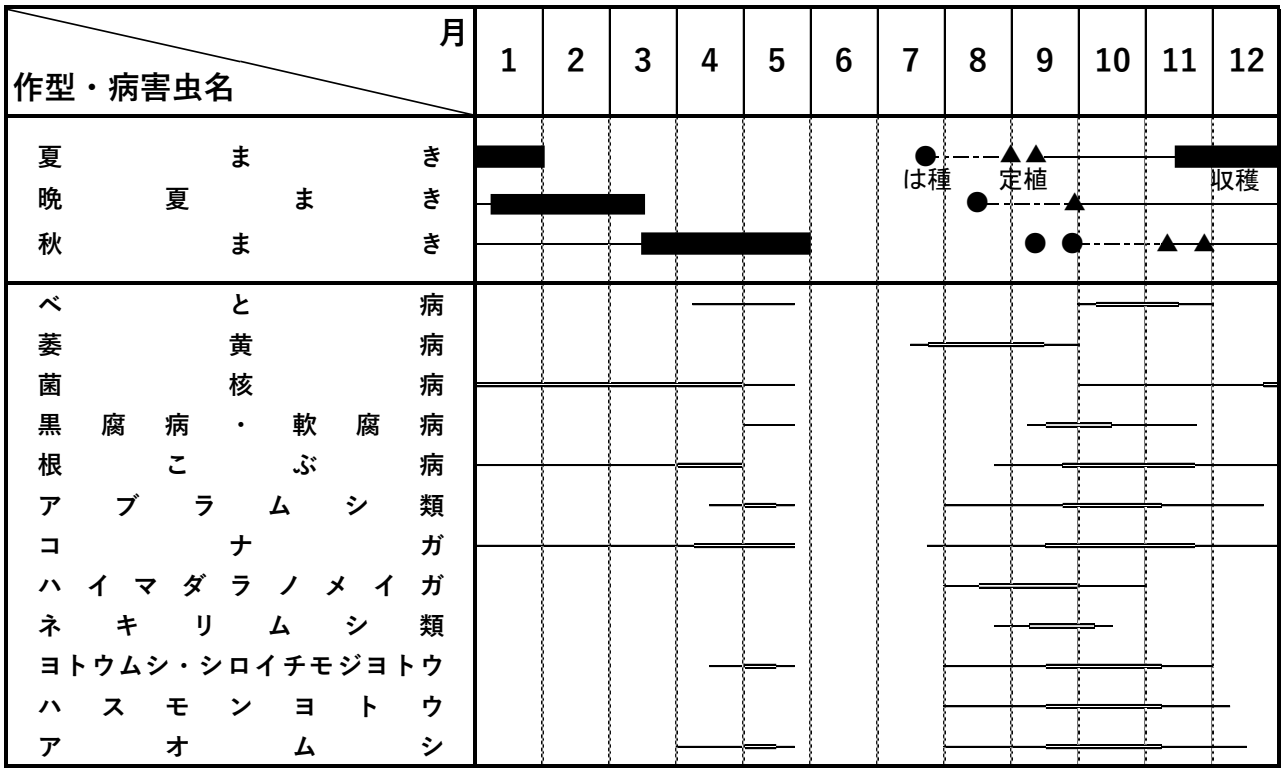
キャベツ



べと病

留意事項

1 低温・多雨での発生が多い。
2 QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
3 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZに含まれる成分マンゼブの総使用回数は、3回以内なので注意する。
4 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZはかぶれやすいので注意する。
5 ダコニール1000、ダコニールアルファ、プロポーズ顆粒水和剤に含まれる成分TPNの総使用回数は、3回以内（は種又は定植前の土壌混和は1回以内、散布及びエアゾル剤の噴射は合計2回以内）なので注意する。

防除方法

1 排水を良好にし、密植を避ける。
2 チッソ質肥料の多用を避ける。
3 被害葉は速やかに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

・ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤　＜Ｍ３＞【400～600倍　30日／3回】
・ダコニール1000　＜Ｍ５＞【1000倍　14日／2回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ダコニールアルファ ＜Ｍ５＞【2000倍　14日／2回】

5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・リドミルゴールドMZ ＜Ｍ３＞ ＜４＞【1000倍　30日／3回】

・プロポーズ顆粒水和剤 ＜Ｍ５＞ ＜４０＞【1000倍　14日／2回】

・メジャーフロアブル ≪１１≫【2000倍　3日／3回】

・ゾーベックエンテクタSE ＜２１＞ ＜４９＞【3000倍　7日／2回】

萎黄病

留意事項

1 夏まきキャベツに発生が多い。

2 土壌温度27～30℃の時、発生が多い。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。

2 発病株を速やかに処分する。

3 耐病性品種（YR、YCR）を用いる。

4 苗床、本ぽを土壌消毒する。（Ⅻ土壌消毒　参照）

菌核病

留意事項

1 菌核が土中に残って伝染源となるので、り病株は放置せずほ場外へ持ち出す。

2 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 連作を避け、田畑輪換を図る。

2 なばなやレタスなど、本病が発生しやすい作物との輪作を避ける。

3 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

・セイビアーフロアブル20 ＜１２＞【1000倍　前日／3回】

5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ベンレート水和剤 ＜１＞【2000倍　7日／6回】

・スクレアフロアブル ≪１１≫【2000倍　前日／3回】

・アフェットフロアブル ≪７≫【2000倍　前日／3回】

・カナメフロアブル 劇 ≪７≫【4000倍　前日／3回】

・オンリーワンフロアブル ＜３＞【1000～2000倍　前日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

黒腐病

留意事項

1 種子・土壌伝染する。
2 9～10月の多雨で低温時に発生が多い。
3 薬剤散布は、特に台風や大雨、強風の直後に行うと効果が高い。

防除方法

1 無病種子を用いる。
2 あぶらな科野菜の連作を避ける。
3 被害葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
4 激発地では、定植時に下記の薬剤を施用する。
・オリゼメート粒剤 ＜Ｐ２＞
【6～9kg／10a　全面土壌混和又は作条土壌混和　定植時／1回】
5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ヨネポン水和剤 ＜Ｍ１＞【500倍　7日／5回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・カスミンボルドー、カッパーシン水和剤 ＜Ｍ１＞ ＜２４＞【1000倍　7日／4回】
・アグリマイシン-100 ＜２５＞ ＜４１＞【2000倍　14日／2回】
・バリダシン液剤5 ＜Ｕ１８＞【800倍　7日／5回】

軟腐病

留意事項

1 薬剤散布は、特に台風や大雨、強風の直後に行うと効果が高い。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
2 過度の早植えは避ける。
3 排水を良好にし、過湿を避ける。
4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ヨネポン水和剤 ＜Ｍ１＞【500倍　7日／5回】
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・カスミンボルドー、カッパーシン水和剤 ＜Ｍ１＞ ＜２４＞【1000倍　7日／4回】
・スターナ水和剤 ＜３１＞【1000倍　7日／3回】
・バリダシン液剤5 ＜Ｕ１８＞【800倍　7日／5回】

根こぶ病

留意事項

1 土壌が乾燥している時に石灰窒素を施用した場合、分解促進のため、かん水を行う。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 オラクル粉剤の成分アミスルブロムの総使用回数は8回以内（但し、苗床での土壌混和は2回以内、かん注は1回以内、本ぽでの土壌混和は2回以内、散布は4回以内）。但し、苗床及び本ぽでの土壌混和それぞれ2回のうち、それぞれ1回は、「おとり植物（葉だいこん、エンバク等）」を栽培する場合であり、その栽培前に土壌混和する場合に使用できる。「おとり植物」の生育期間（1ヶ月程度）及びすき込み後、腐熟させる期間（1ヶ月程度）をおいて、2回目を施用する。

3 ランマンフロアブルの成分シアゾファミドの総使用回数は6回以内（但し、育苗期のかん注は1回以内、本ぽでの株元かん注は1回以内、散布は4回以内）。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。

2 排水を良好にし、過湿を避ける。

3 石灰質肥料を施用して土壌酸度をpH6.5～7.2に矯正する。

4 石灰窒素（石灰窒素50【100～200kg／10a　は種前または植付前／1回】など）を散布後土壌混和する。

5 過度の早植えは避ける。

6 発病した根は、ほ場から持ち出し、集めて処分する。

7 は種または、定植前に下記の薬剤を施用する。

・ネビリュウ ＜３６＞
【20～30kg／10a　全面土壌混和　は種又は定植前／2回】または
【20kg／10a　作条土壌混和　定植前／2回】

・オラクル粉剤 ＜２１＞
【20kg／10a　全面土壌混和　は種前（苗床）／2回】または
【20kg／10a　作条土壌混和　定植前／2回】または
【30kg／10a　全面土壌混和　定植前／2回】

・ランマンフロアブル ＜２１＞
【500倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm、使用土壌約2.5～7L）当たり2L）　定植前日～当日／1回】

8 本ぽで下記の薬剤を施用する。

・ランマンフロアブル ＜２１＞【2000倍　株元かん注（250ml／株）　14日／1回】

9 苗床、本ぽを土壌消毒する。（ⅩⅢ土壌消毒　参照）

・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜－＞
【20～30kg／10a　は種又は定植21日前／1回】

アブラムシ類

留意事項

1 苗床は寒冷しゃで被覆してアブラムシ類の飛来を防止する。

2 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は3回以内（但し、

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

育苗期の株元散布、定植時の土壌混和及びかん注は合計1回以内、散布は合計2回以内）。

3 プリロッソ粒剤オメガ、ベリマークSCの成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内）。

4 アクタラ粒剤5の成分チアメトキサムの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内）。

5 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 下記の薬剤を施用する。

・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【2g／株　株元散布　育苗期／1回】または
【2g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】

2 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。

・プリロッソ粒剤オメガ ＜２８＞
【セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり50g　本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から均一に散布する　育苗期後半～定植当日／1回】

・ベリマークSC ＜２８＞
【400倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり0.5L）　育苗期後半～定植当日／1回】

・アクタラ顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞
【100倍　0.5L／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm・使用土壌約3～4L）　かん注　育苗期後半／1回】

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・モスピラン顆粒水溶剤 劇 ＜４Ａ＞【2000～4000倍　7日／5回】
・コルト顆粒水和剤 ＜９Ｂ＞【3000～4000倍　前日／3回】
・トランスフォームフロアブル ＜４Ｃ＞【2000倍　前日／3回】

コナガ

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

2 幼虫による被害が著しいのは春と秋である。

3 あぶらな科野菜を加害するほかナズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウなどのあぶらな科雑草にも寄生する。

4 セル成型苗では、定植前に粒剤を株元散布すると省力的に防除できる。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

5 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は、3回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は2回以内）。
6 プリロッソ粒剤オメガ、ベリマークSCの成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内）。

防除方法
1 フェロモンディスペンサーを利用する。（野菜類の項　参照）
2 下記の薬剤を施用する。
・ダントツ粒剤 ＜４Ａ＞
【0.5g／株　株元処理　育苗期後半／1回】または
【2g／株　植穴処理土壌混和　定植時／1回】
3 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。
・プリロッソ粒剤オメガ ＜２８＞
【セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり50g　本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から均一に散布する　育苗期後半～定植当日／1回】
・ベリマークSC ＜２８＞
【400倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5L～4L）当たり0.5L）　育苗期後半～定植当日／1回】
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・グレーシア乳剤 ＜３０＞【結球あぶらな科葉菜類　2000～3000倍　7日／2回】
・アファーム乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　前日／3回】
・ディアナSC ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　前日／2回】
・アクセルフロアブル ＜２２Ｂ＞【1000倍　前日／3回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイ）

留意事項
1 だいこん等あぶらな科作物を加害する。
2 8～9月（育苗期～定植直後）の冬キャベツに被害が多い。
3 7～10月が高温少雨の年に多発する傾向がある。
4 食入前の防除に努める。
5 アクタラ粒剤5の成分チアメトキサムの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内）。
6 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は3回以内（但し、育苗期の株元散布、定植時の土壌混和及びかん注は合計1回以内、散布は合計2回

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

以内)。

7 ヨーバルフロアブルの成分テトラニリプロールの総使用回数は4回以内(但し、かん注は1回以内、散布は合計3回以内)

8 プリロッソ粒剤オメガの成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内)。

防除方法

1 育苗中の苗は、寒冷しゃ等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。

2 定植には健全苗を使用し、本ぽへの幼虫の持ち込みを防ぐ。

3 下記の薬剤を施用する。

・アクタラ粒剤5 ＜４Ａ＞
【2g／株　株元散布　育苗期後半／1回】または
【2g／株　植穴処理　定植時／1回】

4 下記の薬剤を育苗時に、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。

・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞
【50～100倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm、使用土壌約3L）当たり0.5L）　定植前日～定植時／1回】

・ヨーバルフロアブル ＜２８＞
【200倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり0.5L）　育苗期後半～定植当日／1回】

・プリロッソ粒剤オメガ ＜２８＞
【セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり50g　本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から均一に散布する　育苗期後半～定植当日／1回】

5 発生初期に、薬液が芯葉にかかるよう丁寧に散布する。

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【結球あぶらな科葉菜類　2000～3000倍　7日／2回】
・アファーム乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　前日／3回】
・ディアナSC ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【1000倍　7日／2回】
・アクセルフロアブル ＜２２Ｂ＞【1000～2000倍　前日／3回】

ネキリムシ類

留意事項

1 ネキリムシ類とはカブラヤガ、タマナヤガ、シロモンヤガ、センモンヤガの幼虫の総称で、被害の大部分は、カブラヤガもしくはタマナヤガによる。

防除方法

1 被害を認めたら下記の薬剤を施用する。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ダイアジノン粒剤5 ＜１Ｂ＞
【4～6kg／10a　全面土壌混和又は作条土壌混和　は種時又は定植時／2回】
または【6kg／10a　土壌表面散布　定植時／1回】
・フォース粒剤 劇 ＜３Ａ＞【4kg／10a　全面土壌混和　定植時／1回】
・アクセルベイト ＜２２Ｂ＞【3～6kg／10a　株元散布　7日／3回】

ヨトウムシ

留意事項

1 若齢幼虫の防除に重点を置く。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アファーム乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　前日／3回】
・アディオン乳剤 ＜３Ａ＞【2000倍　3日／5回】
・ディアナSC ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【1000倍　7日／2回】
・フェニックスマストフロアブル ＜２８＞ ＜４Ｅ＞【2000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

ハスモンヨトウ

留意事項

1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
3 ベリマークSCの成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内）。
4 ジュリボフロアブルの成分クロラントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内）。また成分チアメトキサムの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内）。

防除方法

1 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）にかん注処理する。
・ベリマークSC ＜２８＞
【400倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり0.5L）　育苗期後半～定植当日／1回】
・ジュリボフロアブル ＜４Ａ＞ ＜２８＞
【200倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり0.5L）　育苗期後半～定植当日／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アニキ乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　3日／3回】
・ブロフレアSC ＜３０＞【2000～4000倍　前日／3回】
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　前日／2回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【1000倍　7日／2回】
・フェニックスマストフロアブル ＜２８＞ ＜４Ｅ＞【2000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

シロイチモジヨトウ

留意事項

1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
2 コナガ、ハスモンヨトウなどと同時防除を行う。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　前日／2回】
・スピノエース顆粒水和剤 ＜５＞【2500～5000倍　3日／3回】
・ベネビアOD ＜２８＞【2000～4000倍　前日／3回】
・フェニックスマストフロアブル ＜２８＞ ＜４Ｅ＞【2000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

アオムシ

留意事項

1 幼虫による被害の著しいのは春と秋である。
2 アオムシに対する薬剤の効果は高いのでコナガ、ヨトウムシ類などと同時防除を行う。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・トレボン乳剤 ＜３Ａ＞【1000～2000倍　3日／3回】
・グレーシア乳剤 ＜３０＞【結球あぶらな科葉菜類　2000～3000倍　7日／2回】
・アファーム乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　前日／3回】
・フェニックスマストフロアブル ＜２８＞ ＜４Ｅ＞【2000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。